

Daily comment

FRB インデックス、11 営業日ぶりのドル安も下落率はわずか 0.2%

ドルの総合的な実力を示す FRB 算出の実効為替相場(FRB インデックス)は、11 営業日ぶりにドル安(前日比 0.2%)となった。

もっとも、先週末まで 10 連騰(この間の上昇率は +4.5%)という驚異的な上昇を続けてきただけに、スピード調整が待たれる局面でもあったが、この日の下落率はわずか 0.2%にとどまっており、むしろ押しの浅さが気になるところである。(裏を返せば米ドル以外の通貨が弱いということであり、ドル/円はクロスベースの円買い戻しに圧迫される地合いとなっている)

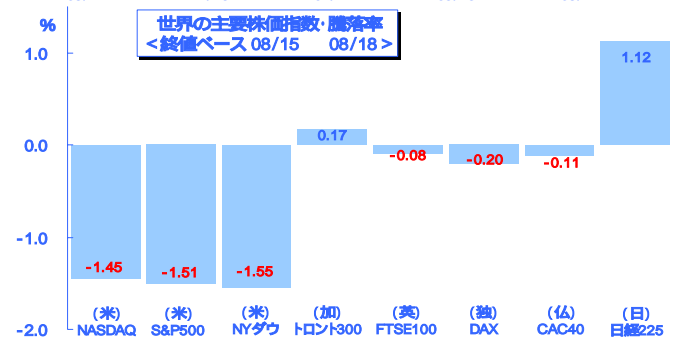
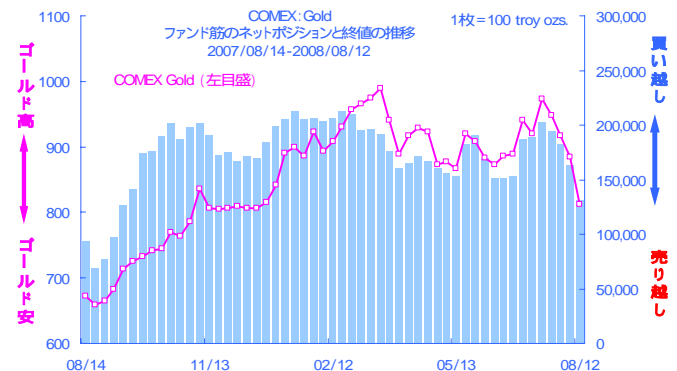
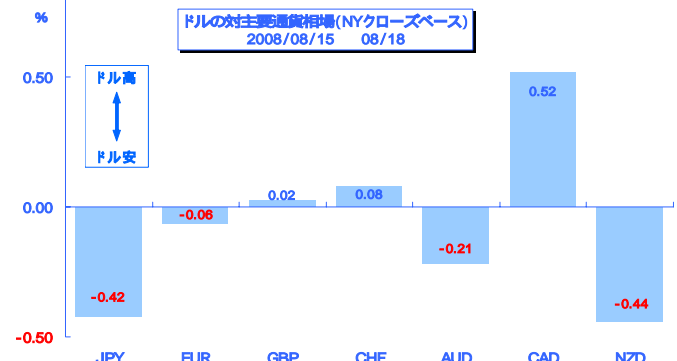
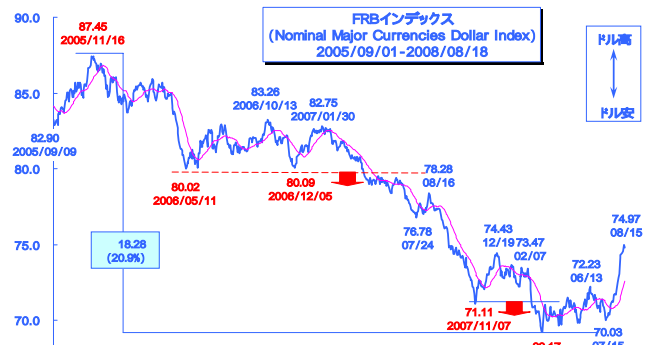
この日のドル安要因とされたのが、先週末まで大幅に下落していた金先物相場の反発や、18 日付の米投資週刊紙バロンズが「米政府はファニーメイとフレディマックに対して公的資金注入を余儀なくされる」と報じたことである。

まず、NY 金先物については、先週末に取引中心の 12 月限が 800 ドルの大台を割り込んで 777.7 ドルまで下落した反動から 809.9 ドルまで買い戻されている。しかし、過去 5 週間の金先物の下落は、世界的な景気減速に伴う需要減少やドル反発に伴うヘッジ取引の解消が背景にあり、流れが変わったと判断するのは時期尚早といえよう。また、NY 金先物の投機的な買い持ち高は急減しているものの、900 ドル超のコストの買いは大幅な含み損を抱えており、持ち高解消ニーズが上値を抑える要因となつてこよう。

次に、米政府が住宅金融大手ファニーメイとフレディマックに対して公的資金注入を余儀なくされる問題については、7 月半ばの米株の急落やドル安局面で織り込んだ材料であり、持続的なドル安要因とはなりづらい。

筆者は毎週月曜日に米投資週刊紙バロンズを読むのが楽しみとなっており、今週号は「ファニーメイとフレディマックの終えんは近い」という特集記事を興味深く読ませて頂いた。

市場では、ファニーメイが資本不足に陥り、フレディマックが事実上の債務超過にあることは周知の事実であり、自力での増資が困難な情勢



当レポートは、投資の参考となる情報提供を目的としたもので、投資勧誘を意図するものではありません。投資の決定はご自身の判断と責任でなされますようお願い申し上げます。記載された意見や予測等は、作成時点における 森 好治郎 個人の見解であり、その正確性、完全性を保証するものではなく、今後予告なく変更されることもありますのでご注意ください。

である以上、いずれ公的資金注入は避けられないとの見方が大勢となっていた。

とはいえ、米財務省が公的資金注入に踏み切った場合、両社の普通株式を保有する既存株主は権利が一掃される可能性が高く、これが改めて株安を促す要因とされたのである。

自己責任原則の下では当然の帰結であり、この日のファニーメイとフレディマックの株価は、それぞれ22.3%安、25%安と20年来の安値で引けている。(米財務省のザッカレリ報道官は、両社救済の権限を行使する「計画はない」と述べている。筆者は資金注入のタイミングは来年2月以降とみている。)

もっとも、市場は金融システム全体の問題としてではなく、個別問題として捉えており、この日の米ドルの下げ幅が極めて限定的なものとなった背景でもある。

さて、昨日のドル/円は下値 109.96 円 - 上値 110.38 円の小幅レンジにとどまったため、日足チャート上で『はらみ線(陽陰)』を出現している。

経験則では直前の陽線を抜ける方向にバイアスが掛かる傾向にあるため、今回の場合は下値 109.63 円 - 上値 110.67 円を抜ける方向に値が走る可能性には留意したい。

それでも、日足チャート上では 95.77 円(03/17)を起点とする『上昇チャンネル』の相場リズムが維持されているうえ、今週末には『89 日平均線』と『200 日平均線』のゴールデン・クロスが実現する可能性が高まっており、上向きで推移する『21 日平均線』が NY クローズで破られない限り、中長期スパンでの押し目買いスタンスは維持しておきたい。

尚、今週の『森レポート』P.7でも述べたが、13 日 RSI(相対力指数)が 80% 台へ上昇する前に 8 月 13 日に付けた 64% を下回る場合は、押し目(調整)が深くなる可能性が高まるため、この局面では下落余地を見極めるため様子見としたい。

(8月19日 11:30 記)



当レポートは、投資の参考となる情報提供を目的としたもので、投資勧誘を意図するものではありません。投資の決定はご自身の判断と責任でなされますようお願い申し上げます。記載された意見や予測等は、作成時点における 森 好治郎 個人の見解であり、その正確性、完全性を保証するものではなく、今後予告なく変更されることもありますのでご留意ください。